(様式２)報告書

令和５年度　ICT を活用した授業改善研究校報告書　亀山小学校

１ 学校の課題

本校の課題は、以下の2点である

① 令和4年度「全国学力・学習状況調査」の結果から、国語科、算数科ともに正答率は全国平均から7～10%の差があり「学力に課題のある児童」が多いことが分かった。また、校内アンケートを行ったところ、教員は基礎・基本的な学力の定着ができていないと認識している一方で、児童側は「学力が身についている」「授業の内容が理解できている」と感じている。これらのことから児童の学力が定着しない一因に、児童が「自己をふり返り客観的に見つめる」ことができていない、いわゆる「分かったつもり」になっているのではないかと推察される。

② 昨年度の反省では、「タブレットの活用は本当に効果的であったのだろうか」という疑問が多くあった。その要因として、ICT を活用した実践を共有する場が少なかったこと、具体的にどのような ICT 活用を研究していくのかが焦点化されていなかったことの2点が挙げられる。そのため、授業実践を深めることが十分に行えず、「タブレットを活用したことが本当に効果的であったか」という点まで、検討することができなかった。また、タブレットの有効な活用方法を探っていくために、教師自身が ICT の操作に慣れ活用方法を継続的に深めていく必要性がある一方で、そのための時間を多く取ることができなかった。

2 研究主題

心楽しくよりよく伸びようとする子供を目指して

～授業づくりにおける効果的な ICT 活用を通して～

3 取組内容

本校では、これらの課題の解決に向けて、学力の定着のために「ふり返り活動」に焦点を合わせ、「①ふり返り活動の充実」、「②ICT の効果的な活用の研究」という2つの視点から取組を行う。また、それを支えるための基盤として、「③環境整備と日常的な活用」に取り組む。

【①ふり返り活動の充実】

ふり返り活動を充実させる自己分析や自己理解を促進し、より効果的な学習方法を児童が自ら見つけていくことを目指して、以下の取組を行う。

- ふり返りのよさや必要性を児童と共有し、ふり返りの視点を教室に掲示する。
- 自己分析や自己理解ができている児童のふり返りを、授業の中で紹介する。
- 過去の授業や、他の教科のふり返りも簡単に見られるよう、形式を工夫する。
- 「1時間の授業」だけでなく、「単元全体」についてもふり返る機会を設定する。
- ふり返りの枠組みとなるテンプレートを作成し、全学年で共有する。
- ふり返りの発問や、どのようなふり返りを価値づけるかについて、研修を通して共有認識を深める。

【②ICT の効果的な活用の研究】

ICT をより効果的に使用し、児童が心楽しくよりよく伸びることのできる授業の方法を研究するために、以下の取組を行った。

- ICT を活用した実践事例を1人1事例作成し、定期的に共有する中で、ICT を効果的に活用した授業のあり方を検討する。
- 目的やねらいに合わせて、どのようなツールを用いて学習を行うか、児童が選択する場面を設定する。
- 校内研、公開研、また、普段の授業の実践の中で、ICT 活用が効果的であったかを検討する。

【③環境整備と日常的な活用】

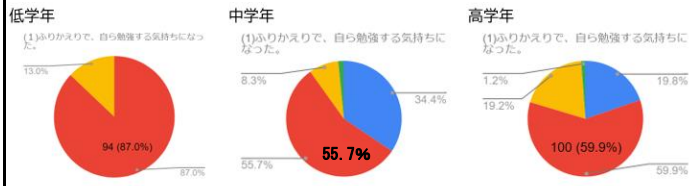
さらに、これらの研究をスムーズかつ効果的に行うために、環境整備（物品の整備・ポータルサイトの構築・基本設定作業）と教員・児童の基礎的な操作スキルの取得を目的に、学校行事・委員会・校務でのタブレットの日常的な活用を行う。また、職員集会後、5分間程度のミニ ICT 研の実施などを通して、研究の基盤を整える。

4 検証結果

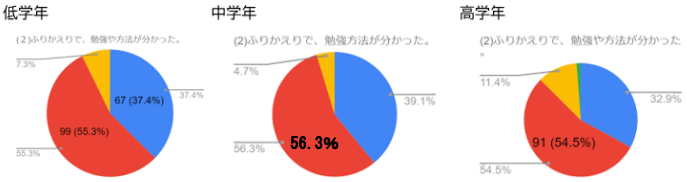
※成果指標の検証方法および結果･成果指標のデータ等

①「ふり返り活動」の検証結果
1.【「ふり返り活動」の児童アンケート調査(１月末)の結果】

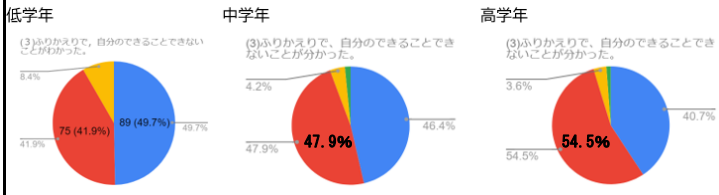
(1)「自ら勉強しようという気持ちになるか」については、低学年は87%、中学年が90%、高学年が79%だった。



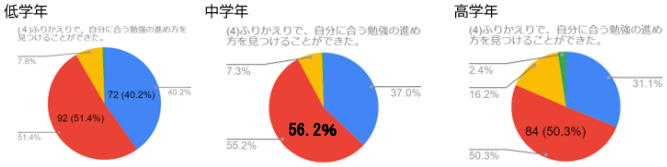
(2)「勉強や方法が分かった」については、低学年、中学年ともに90%以上となり、高学年も80%以上となった。



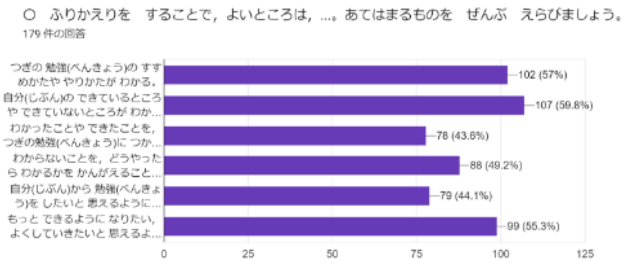
(3)「自分のできること、できないことが分かった」については、低中高学年全てにおいて、90%以上となった。



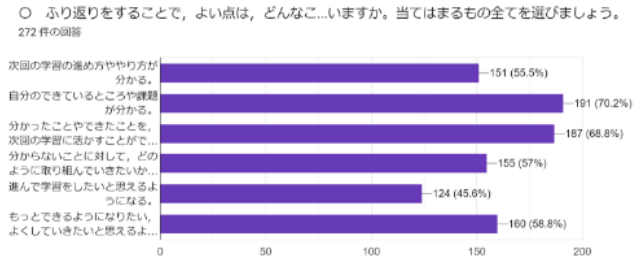
(4)「自分に合う勉強の進め方を見つけることができた」については、80～90%以上の児童が「できたと感じている」と回答している。



・ふり返りの良い点について複数回答で尋ねたところ、「自分のできているところや課題が分かる」を選んだ回答が、高学年は 70.2%、低学年は 59. 8%となり、質問項目の中で一番多かった。
・二つ目に良い点として挙げられた回答は、高学年と低学年で異なった。高学年は、「分かったことやできたことを、次回の学習に活かすことができる」が 68. 8%、低学年は、「次の勉強の進め方ややり方が分かる」が 57%となった。
・三つ目に良い点として挙げられた回答は、高学年低学年ともに、「もっとできるようになりたい、よくしていきたいと思えるようになる」が多かった。高学年は、58.8%、低学年は 55.3%となった。

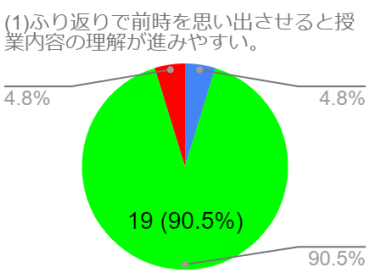


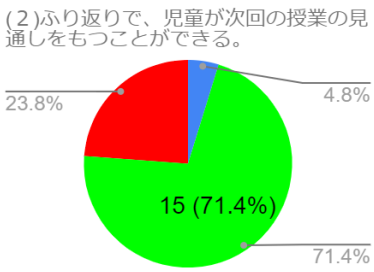
低学年

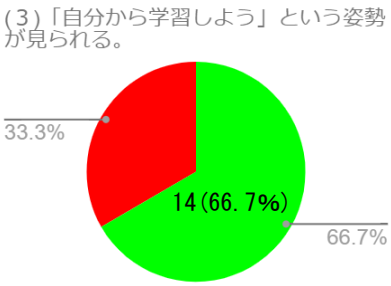


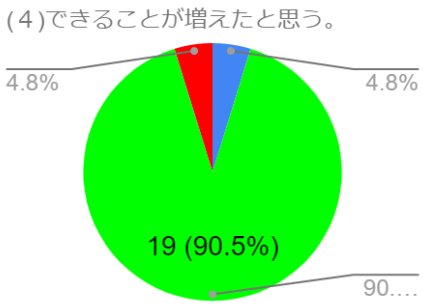
高学年

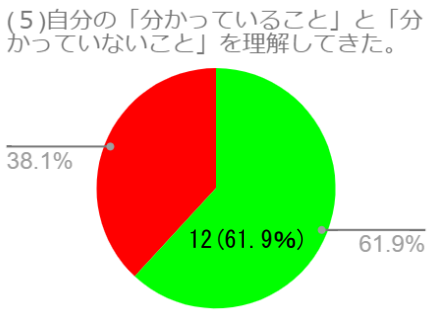
2.【教員意識調査(1月末)】
・「ふり返りで前時を思い出すと理解が進む」は90%以上となった。
・「ふり返りをすると、児童が次回の授業の見通しをもつことができる、またはもちやすい」は76%となった。
・「9月と比較して、『自分から学習しよう』という姿勢が見られるようになった、または増えた」は66.7%となった。
・「9月より、できることが増えたと思う」は90.5%となった。
・「9月より、自分の『分かっていること』と『分かっていないこと』を理解してきた、またはしてきている」は61.9%となった。
・「学習する中で、工夫しようとする様子が増えてきた」は76.2%となった。

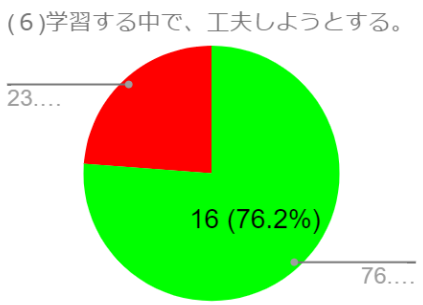












②【児童 ICT アンケート 10 月、1 月の結果の分析】

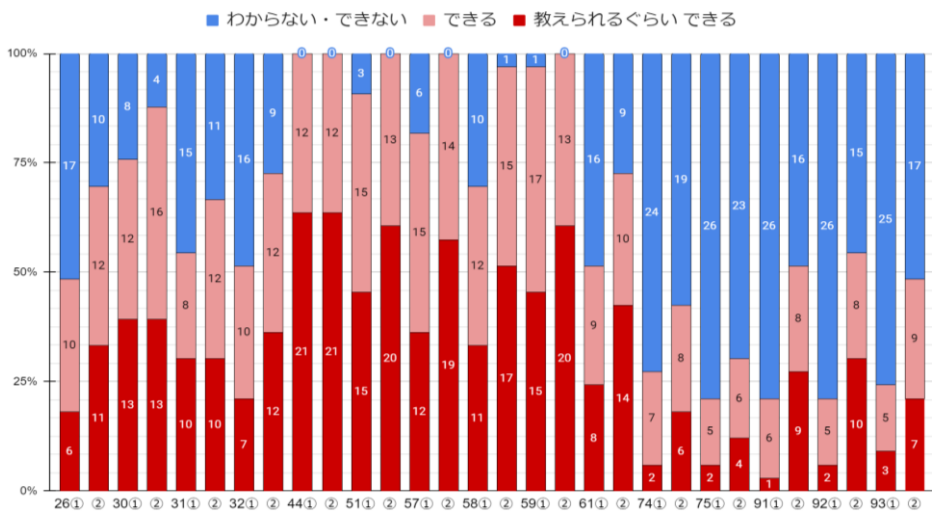
10月と1月に全児童対象に行った児童 ICT アンケートをまとめると、表のとおりである。

児童 ICT アンケートでの肯定的な回答の割合は、どの項目でも増加していた。このことから、タブレットの活用が進む中で、「勉強が分かりやすくなっている」と感じている児童数が多くなり、学習への意欲・主体性が少しずつ高まっているということが分かる。

質問項目	時期	とても	まあまあ	あまり	～ない。
4. タブレットをつかうことで、勉強は、わかりやすくなりましたか？	10 月	47.90%	45.70%	2.20%	0.90%
		93.50%		6.50%	
	1 月	52.80%	43.00%	2.30%	0.50%
		95.80% (2.3%増)		4.20%	
7. 授業では、パソコンやタブレットをつかって、友だちの考えを知ることができましたか？	10 月	46.80%	40.30%	5.40%	1.10%
		87.10%		12.90%	
	1 月	50.70%	42.40%	3.20%	1.00%
		93.10%(6.0%増)		6.90%	
8, タブレットなどを使いながら、自分から勉強に、とりくむことができましたか？	10 月	55.10%	39.60%	5.20%	0.70%
		94.60%		5.40%	
	1 月	55.60%	39.10%	3.90%	0.30%
		94.70%(0. 1%増)		5.30%	

【教員のタブレット操作スキルについてのアンケート】

右のグラフは、
　年度始めの4月…①と
　年度終わりの2月…②に、本校教員に ICT の操作方法の理解度についてアンケートをとった結果である。
　①と②を比べると、「分からない・できない」の青い部分が減っている。これは、タブレットの日常的な活用や、校務でのクラウドの活用、暮会後のミニ研修などを通して、教員のタブレット操作スキルが高まっているということが分かる。



5 研究成果

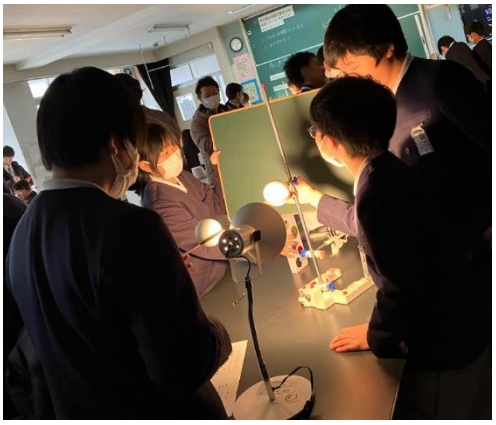
今年度、「ふり返り活動の充実」と「ICT の効果的な活用」を目指して研究に取り組んだことで、「心楽しくよりよく伸びよう」とする児童の育成につながった。

まず、「ふり返り活動の充実」を図ることで、1時間の授業でふり返り活動を行うのを始めとして、単元を見通してふり返り活動に取り組んだ。また、国語科では、オクリンクやスプレッドシートを使用し、始めと最後の振り返りが一目で分かるようにすることで、児童が自然と自身の変容に気づくことができてきた。

また、これは、児童アンケートでも、「学習に臨む意欲」、「学習内容や方法の理解」、「自分のできることできないことへの理解」、「自分に適した学習の進め方」について、「ふり返り活動」を通して、自分の特性を振り返りながら、よりよく伸びるよい方法を模索していく姿が増えている。

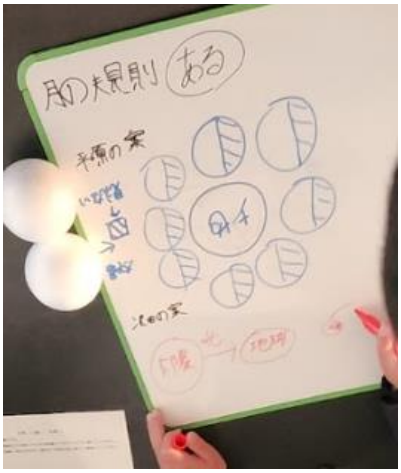
さらに、もう一つの研究の柱として、「ICT の効果的な活用」を中心に授業改善に取り組む中で、児童が日常の行事や委員会でタブレット端末や、クラウドを活用し、教員も校務からタブレット端末や、クラウドを利用の機会を増やした。このことは、タブレットを授業で使う際でも、スムーズにタブレットを使う基礎を築いた。

そして、授業を考える視点として、「**教師が** ICT をどのように使用するか」という視点だけでなく、「**児童が**(使わないという選択・決定も含めて)どのように使うとよりよく伸びようとすることができるか」という視点に変化していった。



この視点に基づいて、児童に「選択と決定」を委ねたことで、自分の考えや思考の過程を様々な方法で表現するようになってきた。

例えば、社会科では、学習課題について調べたことをまとめる活動で、B4の白紙や、ノート、プレゼンテーションソフト、写真などを組み合わせて、自分の考えをまとめるなど、自分に合った方法を選択・決定できるように環境を整えた。その結果、目的に向かって児童全員が学習に取り組んでいた。



また、公開研究会で行った、6年生の理科「月の見え方と太陽」の授業では、“実験の計画と実施方法”を児童に委ねる実践を行った。この中で、「うまくいかない理由を追究し、改善していく姿」「みんなが納得するようなまとめを作ろうとする姿」「問題プリントでわからないところを実験して答えを見つけようとする姿」、「自ら伸びようと前向きに取り組む姿」が増えた。さらに授業の参観者からも、児童のそのような姿について肯定的な感想をいただいた。

また、成果とともに、以下のような新たな課題も明らかになった。

① 単元を見通した振り返りのある授業を組み立てることが難しく、一人一台端末でできるようになったことを、活かしきることが出来ていない。

② 児童に選択・決定を委ねた時に、自由の幅を大きくしすぎると、何をしたらよいのかわからず、学習が止まってしまう児童が出てきた。

これらは、「子どもがよりよく伸びる」ことのできる授業の方法について、研究が進んできたからこそ分かってきた課題である。成果となった取組を継続し、明らかになった課題の改善に向けて、更に研究を進め「心楽しくよりよく伸びようとする子ども」の育成を進めていきたい。

資料1（実験手順書）　　（様式２）報告書

（手順書）

月の見える形の変化には、規則（ルール、きまり）があるのだろうか？

２校時と 20 分

ある

「どのような規則があるのか。」を見つける実験を考える。

準備　修正

実験する。

規則が見つかった

規則は見つからなかった

ない

規則がないことを証明する実験を考える。

準備　修正

実験する。

規則があった

規則はなかった

自分の予想と結果を確認する。

見つけた規則を説明するカードを作る。（オクリンク）

行った実験方法を説明するカードを作る。（オクリンク）

＜先生からのヒント＞

（重要な情報）
・太陽は動かない。
・月は地球の周りを回っている。

（キーワード）
・太陽
・月
・自分

困った時には．．．

・他の班の活動を教えてもらう。（オクリンク）
・教科書
・NHK for School（クラスルームから入れます。）

を頼るという方法もあります。

早くカードができたグループは、ドリルパーク（月と太陽）をしてみましょう。問題が分からなかったら、もう一度実験セットを作って再確認してみると理解が進んでいいですね。

６年　２組　　名前（　　）